

中途半端ではいけない

「着任当時、タクシーに乗って、琵琶湖大橋病院へお願いします、と言ったら、運転手の反応にがっかりしたものです。『ああ、あの病院ね』と、気持ちの良い反応ではなかった。着任から今日までの17年間、私が取り組んできたことは、病院の存在意義を高め、機能を明確にすることにありました」

と、理事長の小椋英司氏は話す。琵琶湖大橋病院は、1980年に設立されたが高齢者医療を中心に展開しており、市民の認知度も高いものではなかった。一方で、天津市北部地域には中核病院がなく、周辺住民の声は急性期医療を求めるものであった。

氏は自らが専門とする循環器を手始めに、地域の急性期医療が担える病院に転換を図ってきた。

「急性期医療を充実させるといっても中小病院には限界があります。あれもこれもと手を出せば、ハードもソフトも中途半端になります。一般に必要とされる機能以上は持たず、後は、特定分野の専門性を高めることにしました」

「糖尿病撲滅運動」を展開

「専門特化する分野は、シンブルに設定しようと考えました。大津

病・院・人・事 担・当・者・に 聞・く——26

～医師の採用、
ここがポイント～

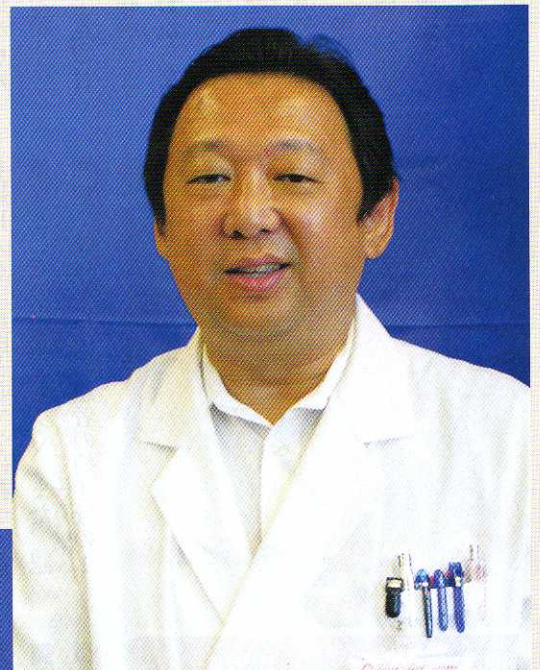
糖尿病を軸に 専門化を図り、 エキスパートが集まる 病院をめざす

日本最大の淡水湖、琵琶湖の南西に位置する滋賀県の県庁所在地、大津市。7世紀には短いながらも「大津京」として栄えた時期もあった歴史薫る街だ。

大津市北部にある琵琶湖大橋病院は、地域の急性期医療を支えつつ、糖尿病を軸にした専門化を図るビジョンを掲げ、発展を続けている。変化を恐れぬ経営を展開する病院の医師採用について尋ねた。

キーワード……人事戦略

医療法人弘英会 琵琶湖大橋病院 理事長・院長 小椋 英司氏



市で最も多い疾患に取り組むことが本筋だと思ったのです」

それが糖尿病であった。人口25万人の大津市だが、氏は人口の1割が糖尿病、またはその予備軍だと推測した。

いま、その実態はそれ以上であることがわかってきたという。

「糖尿病撲滅の啓発活動の一環として、03年12月から週に1回、平日の午後に、看護部が中心となって、近隣のショッピングセンターや農協で『糖尿病バスターズ』を開催しています。無料で簡易型測定器を使って血糖値を計り、血圧もチェックしています」

あるショッピングセンターでの統計だ。1時間半の「糖尿病バスターズ」に61人の買い物客が参加。血糖値が200を超えていた人は8人にのぼった。

「糖尿病バスターズは、そもそも気になっている人が参加しているため、該当者を発見する率が高いともいえますが、市民には予備軍がもつといると思っています」

糖尿病に関連がある科目の医師を招聘しセンター化を推進。現在

理事長・院長 小椋 英司氏 ■1954年、京都府生まれ。82年、関西医科大学卒業。同年、関西医科大学第二内科入局。京都市立病院を経て、89年、琵琶湖大橋病院循環器部長着任。97年、琵琶湖大橋病院院長就任。97年、医療法人弘英会理事長就任。京都大学医学部非常勤講師。日本心血管カテーテル治療学会指導医。医学博士。